



2030年に向けて  
世界が合意した  
「持続可能な開発目標」です



## 一般社団法人地域連携ネットワークみえ

三重県伊勢市御菌町長屋1963

(株)エホ・リノベーション内 (☎0596-63-5080 FAX0696-65-7006)

E-mail [info@3c-mie.net](mailto:info@3c-mie.net) <https://3c-mie.net/>



地球が沸騰しています。今年6月1日に厚生労働省は労働安全衛生規則を改正施行して「職場における熱中症対策の強化」を義務付けしました。もちろん政府から言われなくても自分たちの命にかかわることから、自らが十分留意していかなければなりません。連日熱中症で救急搬送される報道が続いていますからね。

一方で熱い熱い思いで地域を考える若者たちの姿があります。地域づくりに熱中してくれる大学生の姿が鳥羽市に集結してくれました。以前、当通信でも紹介されました東大大学院生 正林(しょうばやし)さんに再度投稿いただきました。

### 地域の主体性を育てる駅へ



#### 一鳥羽駅をめぐる実践から見てきたこと

三重県鳥羽市の玄関口である鳥羽駅は、鉄道だけでなくバスやタクシー、船といった多様な交通が交差する移動の拠点としての役割を担っている。海と山に囲まれたこの場所は、都市と島々をつなぐゲートウェイでもあり、観光客や地域住民、離島住民が日常的に交差する空間でもある。

私自身、2020年に大学生として鳥羽市の離島・答志島を訪れたのがきっかけで、この場所と関わるようになった。研究や活動の拠点として何度も鳥羽駅を通る中で、海が目の前に広がっているのにも関わらず、駅前が駐車場で埋め尽くされていることに対してもったいないなど漠然と感じてきた。そんな感覚は、地域の人々と交わす日常の会話の中でも度々共有されてきた。

そうした中、2024年に鳥羽市が鳥羽駅周辺の再開発計画を正式に発表した。市内の主要団体の代表者によって構成された検討部会が設置され、現在進行形で議論が進められている。この動きに呼応するように、私たちは地域の外からのアイデアによって、地域側が触発されて市民の主体性を育てていく視点から再開発に関与していくべきではないかと考えた。

こうして生まれたのが、「U35 私たちがまちを編み出す。実践アイデアコンペ」という取り組みである。鳥羽駅とその周辺を対象に、35歳以下の若者たちから自由に大胆な提案を募集するこの取り組みは、検討部会の座長であり、地元旅館・扇芳閣の社長である谷口優太さんに相談することから始まった。コンペのテーマを決めるために、鳥羽市役所の方々と打ち合わせを重ね、「自分たちごとを育む、移動の拠点」というキーワードにたどり着いた。鳥羽駅を単なる交通の拠点ではなく、人と人、世代と世代、地域内外の関係性が交差する場として捉えなおし、「誰かのため」ではなく「自分たちのため」に駅を育てていく視点を大切にしたい。

審査員も建築や都市計画、モビリティ、地域づくりに精通した専門家をお願いし、皆さん快く引き受けてくださった。

そうした準備のもと、2024年2月より募集を開始した当初は、正直どれだけの応募があるのか不安もあった。

しかし、3月15日と4月6日に開催した現地視察会には、全国から計80名もの参加者が鳥羽を訪れ、駅周辺で活動する近鉄やとば一番街、定期船など鳥羽駅に係る方々へ聞き取りを実施した。

最終的には150組の登録者から78案の応募が集まり、私たちの想像を遥かに超える反響となった。一次審査を通過した6案はどれも個性的で、地域でどのような議論を生み出すことができるのかを大事な要素として審査員によって選ばれた。



正林泰誠(26)  
東京大学大学院  
博士課程1年

東京都出身。2020年から三重県鳥羽市答志島に通い始めて、2022年度から地域おこし協力隊として活動。現在は離島や半島といった条件不利地域でのコミュニティづくりを各地で研究・活動している。



#### 5名の審査員



- |        |                        |
|--------|------------------------|
| 藤原 徹平  | FUJIWALABO 主宰          |
| 指出 一正  | 「ソトコト」編集長              |
| 大井 隆弘  | 三重大学工学研究科建築学専攻准教授      |
| 湯谷 紘介  | 株式会社 KISE 代表取締役 湯谷建築設計 |
| 佐藤 和貴子 | 株式会社 AMANE             |

#### 現地視察会の様子



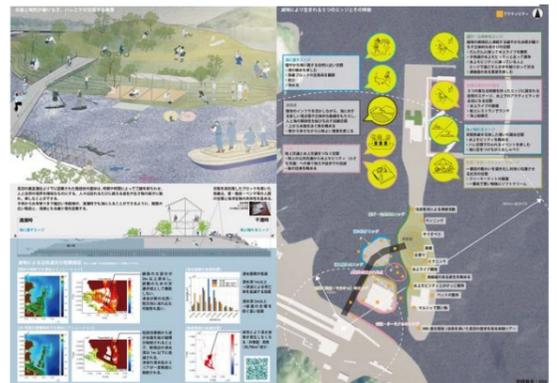
5月31日には「鳥羽駅アイデア構想会議」と題し、一次審査通過者を鳥羽に招き、地域関係者とのディスカッションの場を設けた。この場では、次の最終審査会にむけて、提案をどう実現に近づけていくか、地域の駅への捉え方が大きなテーマとなり、

7月5日には最終審査会が開催され、最優秀賞が朝のリレーの吉野さんらによる『海へ還る、水と共に生きる、佐田浜』、優秀賞が『15,000tの円環 牡蠣のアップサイクル工程による自分ごとで考えるまちづくり』に決定した。会のなかでは、地域の会参加者がより自分たちごととして駅をとらえていただくために、とばみらいカードをお渡しして、もし提案が実現されるのであれば、私はこんなことができる！という可能性を書いていただき、提案者にお渡しする取り組みを導入した。とばみらいカードをお渡ししたお返しとして、各提案の葉を参加者にお渡しして、日常生活で提案のことを思い出していただけるよう工夫した。今後、この提案を検討部会の中で発表し、実現に向けて具体的な議論が進められる予定である。最優秀賞を獲得された吉野さんは、「最終審査会でもあり、これが再スタートでもある」と語っており、これから6案のファイナリストの方々が協力し合いながら地域を動かしていくことに期待している。小さな芽が、地域の中でどのように育っていくのか、私たち自身もその過程を伴走していきたいと考えている。

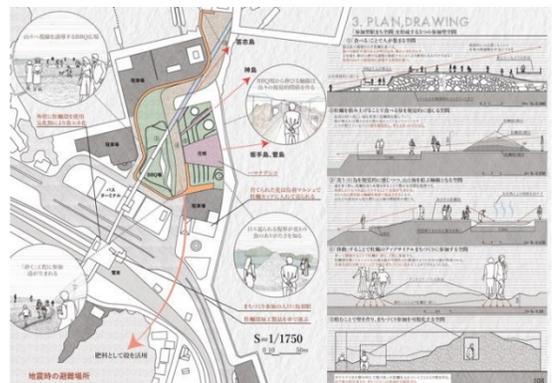
さらに、8月4日から6日には高校生を対象とした「実践アイデアキャンプ」も開催予定だ。鳥羽市内の高校生だけでなく、全国各地から建築やまちづくりに興味のある方が集まる予定である。大学生や専門家とともに鳥羽駅周辺を歩きながら、どんな空間の駅になるとワクワクするかを考え、小さな社会実験に取り組む。机上の空論ではなく、身体を使って、地域の一部として関わりながら考える場とする。

鳥羽駅という場所が、ただの通過点ではなく、地域の人々が自らのまちなに関心を持ち、小さな声を重ねる出発点になってほしい——そう願いながら、私たちは小さな実践を積み重ねていく。再開発という大きな枠組みの中でこそ、声なき声をどうすくい取り、実装していくかが問われている。鳥羽駅の未来は、誰かが決めるものではなく、私たち一人ひとりの手によって少しずつ編み出されていくものなのだ。

**最優秀賞 『海へ還る、水と共に生きる、佐田浜』**  
吉野和泰、小西なずな、小野純実、本田美波



**優秀賞 『15,000tの円環 牡蠣のアップサイクル工程による自分ごとで考えるまちづくり』**  
吉田キラリ、五十嵐奏大、高橋侑暉



鳥羽駅アイデア構想会議の様子



公開最終審査会での集合写真



とばみらいカードと葉の交換会



後記：老若男女、駅にはさまざまな思いがあります。しかし若い人たちのアイデアには目からウロコですね。